

◆姉妹市訪問団 生徒感想文

(1) 英語でコミュニケーションを取って

立川市立立川第一中学校 2年 佐藤 澄佳 Sumika Satoh

2019年5月、私は学生親善訪問団の一員として、立川市とサンバーナディノ市姉妹都市締結60周年を祝うために、アメリカを訪れました。海外に行くのは初めてでは無かったのですが、英語圏の国は初めてでした。荘厳な式典、総領事館、憧れの Hollywood・・・テレビでよく見る場所、今度私が実際にそこに行くよ！通訳の添乗員さんに頼らず自分で英語で一杯話したい！とわくわくしていました。

実は私が生まれた時、私の兄は英語がとても上手でした。でも私は英語に興味を示さず、やがて3歳から、毎日英語漬けの地獄の様なトレーニングをさせられました。私は何回も「なんて英語をやらなければいけないの？」と反発したことがありました。「大きくなったら、外国に行ったり、外国人と話したり、英語は必要ですよ！」と母が説明すると、私はいつも「私は外国なんか行きたくない！」と怒鳴り、英語に関してはいやな思いばかりでした。

ところが、毎日の練習の積み重ねのお陰で、5歳の時に、学んでいた英語教材の最後の課題をクリア出来ました。そして、いつの間にか私は英語が好きになり、8年間日本語を一切使わない母国語式英会話教室に通っていました。中学校に入ってから、英語は日本語で学ぶ形式なので、頭が時々混乱しています。小さい頃自然に出来た英語を忘れ、頭の中で英訳、和訳を繰り返し、スピーキングはかなり遅くなってしまいました。

今回アメリカで入国の手続きをした時は、顔認識の機械の使い方が分からず、正しい英語でなんと伝えれば良いかと少しためらっていましたが、思い切って、空港の方に質問しました「How can I use this?」すると向こうは「Press this button, then this one.」と優しく教えてくれました。「やった！通じた！」小さい頃の自分が少し蘇った様な気分でした！

二日目と三日目の式典が終わり、食事をしながら、現地の方々と名刺を交換し、お互いに日本やアメリカの事などを話し楽しく交流が出来ました。また、自分からもアメリカについて色々な質問をしてみると、現地の方はとても明るく笑顔で答えてくれました。

三日目のサンバーナディノ市の学生さんとの交流はとても印象的でした。交流会が始まったら、私は少し固まっていた。一人の現地の学生さんが「I told my co-workers that I am sick. Then I came here.」と冗談を言って、私は緊張がほぐれ笑いました。その後、皆が木で作られた星に色を塗った時、ピンクの絵の具が足りなくなり、私が直ぐに「Pink, please.」と言いました。私の作品が終わり手持ちぶさたの時、一人の学生さんが彼女の作品を指して、「If you like, why not paint mine?」と言ってくれたので、二人で一緒に色を塗りました。お昼に皆でピザを食べて、自己紹介をし、今アメリカで流行っているゲームをしました。現地の学生さんがフレンドリーに話しかけてくれることによって、自分ももっと話したいと思うようになり、皆で会話が弾み、とても楽しかったです。現地の学生さん達との交流が終わる時、時間が過ぎるのはとても速く感じました。

帰国の際、空港で道が分からなかった時にアメリカ人に英語で聞くことが出来ました。また、売店でお土産の値段を聞こうとした時に、緊張して、「Excuse me, can I ask you a question? How much is it?」と言いました。店員さんが微笑んで「Oh, nice question! It is 9 dollars.」と答えてくれました。後で考えたら、「Can I ask you a question?」なんて言う必要がなかった事に気がつき、店員さんの「Nice question!」はとても優しく感じました。

初対面の現地の方々とコミュニケーションが出来たこと、今回の旅の一番の思い出となりました。一緒に四泊六日の旅をしていた十四人の仲間との友情が出来たこと、一生の宝物だと思えます。小さい頃から英語を学んでいて良かった！積極的に英語で話せて良かった！将来、英語を使って、外国の方々ともっとコミュニケーションを取って、色々な国の文化や歴史に触れて、国際交流に貢献出来る仕事が出来たら良いなと思いました。

## (2) 笑顔

立川市立立川第一中学校 3年 川田 彩可 Ayaka Kawada

今回、私は初めて海外へ行きました。そのため心配なことばかりで、ましてやほとんど交流がなかった人と行くとなるとより緊張しました。しかし、みんな優しく、フレンドリーだったので、想像よりもはるかに楽しむことができました。

私が特に印象に残っている出来事は、現地の学生との交流です。言葉の壁に不安を抱えていましたが、ゲームがとても盛り上がり、不安も飛んでいきました。たとえ国は違っても、ひとつのことにみんなで盛り上げられることは「なんて素敵なことなんだ」と思いました。

文化の違いにも驚くことが四つありました。

一つ目は、スケールの大きさです。食べ物一つ一つが大きく、私のおなかには、すぐに膨れてしまいました。高速道路も片道だけで何車線もあり、道幅が広がりました。また、走っている車も日本のような軽自動車は少なく、SUV などが多くみられました。日本のメーカーの車も多くみられ、海外でも日本の車が信頼されているのかと思うとうれしくなりました。

二つ目は、建物の外観です。日本で目にする、目立つような建物が主流で、近代的なデザインに感銘を受けました。私たちが住む立川にも個性的な建物はありますが、多くはありません。近代的なデザインの建物をさらに増やし、個性が光る街立川になっていって欲しいです。

三つ目は、人と人の距離感が近いことです。日本のスーパーだったら、お会計で店員さんと会話することはありません。ですが、アメリカの店員さんは今日の調子などのちょっとしたことを質問してきてくださったりなど、フランクで親しみやすい方々でした。私は、自分から距離を縮めることが得意ではありませんが、お会計という少しの瞬間でも楽しめる空間を作ってしまう部分に感激しました。

四つ目は、気候です。日本は、空気がじめじめしています。しかし、アメリカでは空気がカラッとしていて過ごしやすかったです。同じ地球上の生活でもこうも変わるのかと知り、視野が広がった日々でした。

そして私は、この姉妹市提携60周年記念事業訪問を通して、とても大切なことを学びました。それは、「笑顔」です。私は、あまりべらべらと英語が話せません。なので、始めは現地の方と緊張もあってか、なかなかコミュニケーションが取れませんでした。しかし、そんな中でも笑顔でいると互いに緊張が解け、自然と仲も深まっていきました。笑顔で会話をしていると心地よくなり、不慣れな英語の会話も自然と弾みました。普段から、笑顔でいることは大切なこととわかってはいましたが、この重要性を身をもって体験することができました。安らぎを与えてくれる「笑顔」をこれからの生活や、将来につなげたいです。

私たち 15 人がこのような素晴らしい体験ができたのも、もとをたどれば一つの作文からです。普通に過ごしていたら、出会うことのなかったかもしれない中学生たちが自分の考えを込めた作文が選ばれたことによって、出会いました。一生忘れない出会い、体験をさせていただき本当にありがとうございました。



アカデミー賞の授賞式会場 DOLBY THEATRE

### (3) 日本とアメリカの違い

立川市立立川第二中学校 2年 加藤 結愛 Yume Katoh

私は今回のアメリカ訪問で、日本とアメリカの違いに注目しました。ロサンゼルス空港に到着してまず驚いたのは、アメリカ人は日本人よりも圧倒的に背が高いということです。髪の毛の色や肌の色、目の色も違っています。同じ人間でも国によってこれほど容姿に差があることに驚かされました。

移動の際バスから見える街の景色も日本とは大きく異なっていました。変わったバスが走っていたり、普通の道をディズニーキャラクターなどのコスプレをして歩いている人も見かけました。

訪れた総領事公邸では、厳格な雰囲気や内装の美しさに圧倒され、とても緊張しました。初めて目の前でアメリカの国歌を聴き、日本の国歌よりも長く美しい歌に、歌詞がわからない私でも感動しました。また、その後の夕食会では現地の方々が明るく接して下さり、あやふやな英語しか話すことしかできませんでしたが、コミュニケーションが取れたことが本当に嬉しかったです。

サンバーナディノ市の学生とも交流をしました。同じ学校でもアメリカと日本では建物の外見、造りにも違いがあり驚きました。日本語で自己紹介をしていただき、外国の方々に自分の国の言葉を話してもらえることが、どれほど嬉しいものなのか気が付きました。みんなでのランチは、さすがアメリカ！と言わんばかりの大きなピザでした。一切れで満腹になってしまうほどでした。学生の方々はどんな時でも明るく接して下さり、一緒に話しているだけでとても楽しい気持ちになりました。みんなでゲームを行うと、その明るさでどんどん盛り上がり、あっという間に時間が過ぎてしまいました。別れる前に沢山の写真を撮りました。

記念式典で私たちは法被を着て立川音頭を踊りました。今まであまり踊ったことがなく気が進みませんでした。私たちの踊りを見たアメリカの方々が素晴らしいと褒めて下さり、一緒に踊ろうとしてくれました。私は嬉しくて、少し盆踊りが好きになりました。

いよいよ日本へ帰る日になると、楽しかったアメリカと別れるのがさみしくなりました。ですが、アメリカに行って初めて気づいた日本の良いところをたくさん思い出し、改めて日本の素晴らしさも感じました。

今回のアメリカ訪問の中で、髪の色などの外見や街の様子、食文化、心のありようなど、さまざまな違いに気が付きました。ですがアメリカの方々はそんな小さな違いを軽く飛び越え、私たちと明るく接して下さいました。私たちの国の文化を受け入れ、一生懸命同じ言葉で話そうとしてくれました。その半面私は、初めての海外で初めて触れ合う外国人にとっても緊張してしまいました。更に自分の英語力も低く、思いを伝えることができませんでした。もっと英語を話せるようになりたい、気持ちを伝えたいと強く思いました。

日本では来年、東京オリンピックが開催されます。外国の方々がたくさん日本へやってくるのです。今からとても楽しみです。いろいろな国の文化や価値観も認め、受け入れられる人になりたいと思います。そして互いを認め合う気持ちが広がり、これからの社会が平和になって欲しいと願っています。



現地のガイドさんいわく「特別な日に予約したい高級レストラン」 The Castaway San Bernardino

#### (4) 学んだこと

立川市立立川第二中学校 2年 佐藤 ほの Hono Satoh

私は、姉妹市提携60周年記念でサンバーナディノ市を訪問しました。それにあたり、私の目標は3つありました。1つ目は、アメリカの文化を知ることです。アメリカと日本では、どのような文化の違いがあるのか興味があったからです。この機会に、文化の違いを見つけ、両親や友人たちに伝えたいと思いました。2つ目は、アメリカの人たちに自ら話しかけることです。私は、海外へ行ったことはありますが、いつも両親に頼ってばかりでした。飲食店での注文や、買い物をするときなど、両親に代わりに話してもらっていました。しかも私は、人見知りで、日本の人が相手でも自分から話しかけられません。私はこの消極的な性格を変えていきたいと思いました。3つ目は、サンバーナディノ市を知ることです。立川市と60年も続いている姉妹都市関係を知ることによって、より深くこれからも長く続いて欲しいからです。今まで続いてきた関係を、私たちよりも後の世代の人たちにも大事にしてほしいです。この3つの目標を心にとめて、羽田空港を飛び立ちました。

到着直後のロサンゼルス空港は、色々な人種の人たちが忙しく行き交っていて、聞こえてくる言葉も、目に入る看板も英語で、本当にロサンゼルスに到着したのだと実感しました。イミグレーションの時に、機械での自動手続きのやり方を、現地の職員の方に聞きました。2つ目の目標にアメリカの人に自ら話しかけるとしていたので、少しでも達成できたのではないかと、嬉しくなりました。この調子で、今回の訪問中も挑戦していきたいと思いました。

その後、ロサンゼルス市内の見学や、ロサンゼルス総領事公邸表彰式典などに出席し、思う存分ロサンゼルスを楽しむことができました。3日目、サンバーナディノ市での活動になりました。現地学生との交流事業に参加しました。星型に切られた木材に絵の具で色を塗ったり、一緒に昼食をとったり、ゲームなどをしました。その時に、サンバーナディノ市の生徒のみなさんが、学校や趣味のことを質問してくれました。立川市から来た私たちに対して、積極的に話しかけてくれ、おもてなしをしてくれました。60年もの間続いているサンバーナディノ市と立川市の関係のおかげで、現地学生のみなさんとのこのような機会に恵まれたのだと思いました。3つ目の目標、サンバーナディノ市を知ることの一つになったと思います。

その後、姉妹市提携60周年記念式典に出席しました。立川音頭をみんなで披露しました。サンバーナディノの方たちが、みなさん笑顔でみてくれて盛り上がりました。バイオリンの演奏などもあり、とても素敵な式典でした。

その時、とても気になったことがありました。現地学生のみなさんがTPOに合わせ、華やかなワンピースやスーツを着ていました。日本の場合、学生の正装は制服になることが多いと思います。それが当たり前だと思っていたので、ドレスコードのある場所や、TPOに合わせた様々な服装ができる文化を素敵だと思いました。1つ目の目標、アメリカ文化を知ることというのを少し達成できたと思います。

今回、訪問団として参加させてもらえて、様々な経験をすることができました。この貴重な体験を今後に活かすとともに、これからも、サンバーナディノ市と立川市が姉妹都市として良好な関係を築いていくことを願っています。

地元の絵画教室  
Garcia Center for the Arts



(5) 姉妹都市提携60周年記念サンバーナディノ市訪問をおえて

立川市立立川第三中学校 2年 浅井 紗和 Sawa Asai

2019年(令和元年)、立川市とサンバーナディノ市が姉妹都市となって60周年の記念の年を迎えました。姉妹市提携60周年を記念して、「第38回立川市中学生の主張大会」で発表した中学生15名がアメリカ・サンバーナディノ市へ派遣されることになりました。

夏休みの宿題で作文を提出した時には、サンバーナディノ市への派遣のことなど全く考えていなかったのですが、実際に立川市清水市長をはじめ、姉妹都市委員会の方々、代表の中高生の皆さんと一緒にサンバーナディノ市への訪問の機会を頂けることが決まり、私も家族も、友人もとても驚いてしまいました。

出発前に「姉妹都市」について調べてみると、日本と南カリフォルニア州との間には、これまで42組の姉妹都市関係が結ばれていて、立川市の姉妹市提携は東京都では初めてのこと(全国では27番目)。1959年(昭和34年)に、「文化・経済等の交流を通じて、両市民の親善と理解、世界平和達成への貢献」を目的として立川市姉妹市委員会が結成。1962年(昭和37年)からは高校生の相互派遣が開始され、60年の間に約400人の日米の高校生が派遣プログラムに参加していました。

また、立川市の事前学習会を通して、60年という長い年月を、立川市とサンバーナディノ市の大勢の方々の気持ちと行動で繋げてきた姉妹都市の記念の年に、代表として現地に行く機会を頂いたことはとても重大なことだということがよくわかりました。

5月23日に出発。羽田からの飛行機の遅れにより、現地での1日目の予定がなくなるという思わぬハプニングもありましたが、2日目には姉妹都市委員会の方々とは合流し、ロサンゼルス総領事公邸での総領事表彰の授与式と記念レセプションへの参加となりました。

総領事の方の「日本で60年は『還暦』、一回りしたという意味で新たなスタートと捉える」というお話に、この新たなスタートに出席した私達が、これから未来に繋げていくことが大切なんだと感じました。

3日目には、サンバーナディノ市で現地の学生の皆さんとの交流。自己紹介では緊張してしまいましたが、希望の星ペインティングや、食事会を通して、とても仲よくなることができました。驚いたことに、交流した方の中に、サンバーナディノ姉妹市委員長の息子さんがいて、お母さんは35年前に派遣高校生として立川に来られ、今年は息子さんが立川に派遣高校生として来られるとのことでした。夜の記念式典では、国歌君が代斉唱や、東京オリンピックの法被を着て立川音頭を披露、姉妹都市の歌「We Are One」の合唱、皆さんのスピーチなど、楽しい時間の中に文化交流を深めることができました。

4日目にはアナハイム・ディズニーランド見学。スプラッシュ・マウンテンには安全バーがなく、よりスリルを味わうことができるなど、ここでもまた文化の違いを体感することができました。

帰国して立川市役所で解散式。この訪問でそれぞれが感じてきたことを清水市長に報告。私は、サンバーナディノ市の皆さんはどこでお会いしてもとても優しくフレンドリーで、積極的に日本語で話しかけてくれて嬉しかったことを報告しました。

派遣高校生の方が立川に来られた時には、私も積極的に英語で話しかけてみたいと思います。また、サンバーナディノ市の代表の方を招いて60周年の記念式典を予定しているとお聞きしているので、何かの形でお手伝いをさせて頂きたいなどと思っています。

立川市、サンバーナディノ市の多くの皆さんのご協力を頂き、無事に姉妹都市提携60周年記念サンバーナディノ市訪問の6日間を終えることができました。

ありがとうございました。



## (6) サンバーナディノ市 訪問団

立川市立立川第六中学校 3年 葛西 知夏 Chika Kasai

初めての海外。日本とは違う文化や言語。学校の違う友達との生活。現地の学生さんとの交流。アメリカに行くことが決まった時、私は不安でいっぱいでした。

でも、そんな不安を抱えながらも5日間アメリカで過ごしてみて感じたことがあります。

今回の滞在では現地の方との交流をする機会をたくさん設けていただきました。しかし、始め人見知りの私は現地の方にうまく話しかけることができませんでした。それでも向こうの方々は笑顔で話しかけてくれたり私の拙い英語を聞き取ってくれようとしていたりしました。そのうち私は自然に笑顔で話せるようになっていきました。英語も少しですが聞き取れるようになりました。自信がなくてなかなか自分から話しかけることはできませんでしたが、例え言葉が通じなくても笑顔でいることが大切だと思いました。身を以て笑顔と挨拶の大切さを実感しました。初対面でも笑顔の挨拶は距離も縮まる大切なツールです。

アメリカでは何もかも日本と違いました。言葉はもちろんですが、街や店の雰囲気、マナーも違います。至る所で海外に来たんだな、と感じました。私が一番驚いたのは、お店の店員さんの愛想がよくなかったことです。なかには優しく教えてくれた方もいましたが、基本的には冷たかったように感じました。よく日本に来た海外の方が、日本人は親切だと言っていますが、なるほどその通りと思いました。アメリカに来たことで日本の良さが実感できました。

今回の滞在はたくさんの刺激を受けました。すべてが初体験ばかりで悩み、戸惑いながらも行動し、自分自身の成長に繋がったと思います。

私は今回の経験を通してもっと英語を学んで色々な国に行ってみたいと思うようになりました。今回は5日間と短い滞在でしたので、次はもっと長くたくさんのかたちを経験してみたい、世界をみて自分の視野を広げていきたいと思いました。

今回一緒にアメリカに行った友達、随行してくださった職員の方々、向こうで私たちを歓迎して下さった現地の方々、このようなすてきな機会を与えてくださった市長さん、私たちを支えて下さったたくさんの方々に感謝を忘れずにこの経験を色々な場面で生かしていきたいと思います。

ありがとうございました。



## (7) 心で繋がる姉妹都市

立川市立立川第七中学校 3年 張替 望恵 Moe Harigae

5月23日から6日間、姉妹都市であるアメリカのサンバーナディノ市に訪問団員として行かせていただきました。姉妹都市60周年の記念式典などに出席し、ロサンゼルス総領事公邸を訪問するなど、経験のない事ばかりでとても緊張していました。でも、それよりも楽しみでワクワクする気持ちの方が何倍も大きかったです。

当日の出発式で、清水市長が6という数字は日本では昔からとても良い数字とされてきたという話をしてくださいました。私は、「この60周年の節目に自分がこんなに素晴らしい経験ができるなんて有り難い。しっかり笑顔で心を込めて参加しよう。」と思いました。

私は以前、杉原千畝物語という本を読み、領事館に興味を持っていました。杉原さんは第二次世界大戦の折にドイツから迫害を受けるユダヤ人の命を、ビザを書いて救った方です。私はこの本を読み、沢山の人の命を救った杉原さんが働いていた領事館はどんな所なんだろう、と思っていました。

だから、今回、総領事公邸での表彰式と夕食会に参加させていただけると聞き、とても嬉しかったです。実際に総領事公邸の職員の皆さんはとてにこやかに温かく私たちを迎えてくださって、やはり心の広い方々が沢山いらっしゃる場所なんだと感じました。



違う国の人に自分から英語で話しかける事は、とても勇気が必要でした。でも、自分から勇気をだして総領事公邸の方に話しかけ、コミュニケーションが取れた時はとても嬉しかったです。

また、サンバーナディノ市の学生さんとの交流では、自己紹介をしあったり、レクリエーションをしたりして一日を一緒に過ごしました。自己紹介の時、私たちは英語で自己紹介をしました。うまく話せているのかが少し不安でしたが、サンバーナディノ市の学生の皆さんが笑顔で聞いてくださってとても嬉しかったです。また、

現地の学生さんは日本語で自己紹介をしてくれました。会話をしていくうちに、日本の事を沢山知ってくれていることに気づき、とても嬉しく、違う国同士でも、互いにそれぞれの文化や言語について興味を持って学んでいくことにより、笑顔の輪が広がっていくのだと感じました。そして、言葉がうまく通じなくても、お互いにわかり合おうとする気持ちが大切なんだと気づくことができました。

私は現地で知り合った方々に手作りの名刺を渡しました。名刺には、英語で「Life around the world is connected」(世界中の命は繋がっている)と書きました。そして、日本を感じてもらえるように千代紙で作った折り鶴を貼り付けました。

これからも、遠く離れた場所に立川市と姉妹であるサンバーナディノ市があり、そこには心が繋がっている人たちがいるという事を大切に立川市で過ごしていきたいです。

私たちが今回、このような貴重な経験ができたのは、長い時間をかけて私たち中学生のために心を込めて色々計画してくださっていた清水市長をはじめ、立川市の職員の方々や、姉妹都市委員会の方々、そして、サンバーナディノ市の方々の沢山の苦労があってこそだと思います。私たちは立川市とサンバーナディノ市の愛情を感じる事のできる、楽しく、貴重な数日間を過ごさせていただきました。

今回学ばせていただいた沢山の事を忘れずにこれからの生活に活かしていきたいです。

本当に、貴重な経験をありがとうございました。

## (8) アメリカ

立川市立立川第八中学校 3年 大田 夏帆 Kaho Ohta

私は今回アメリカのサンバーナディノ市に行かせていただいて、沢山のことを学ぶことが出来ました。当然言語も違うし、歴史や文化が違う中で、不安もありましたが、楽しむことが出来ました。

私はアメリカに行くにあたって目標を決めました。それは、誰でもどこでもいいから自分からアメリカの人に話しかけることです。そして自分の知っている英語を最大限に使うことです。私は、自分から話しかけるのが得意ではないし、英語も得意ではありません。ですが、現地の方はとてもフレンドリーで優しく対応してくれました。たまに自分が聞き取れなかった時も何回も言ってくれたりわかりやすくしてくれたり、コミュニケーションをとることができました。こんな私でも少し英語に自信がもてたような気がします。そして、英語に興味を持ちました。この目標に決めたからこそ英語に興味を持つことができ、もっと英語を勉強してもっとコミュニケーションをとりたいと思うようになりました。そして、現地の方たちのようにフレンドリーになりたいです。この目標を決めて良かったです。

私はアメリカに行くのは初めてで、とても楽しみの半分、不安もありました。日本では当たり前のことがアメリカでは違ったり、アメリカで当たり前のことが日本では違ったり、その違いを見つけるのが楽しかったです。例えば家の中では土足でいいなど私達はホテルでしたがそういう決まりがあることを初めて知りました。これやっても大丈夫かなとか、これどうやるんだろうとか、全然わからなくて苦戦し、習得するのに時間がかかりましたが、どれも良い経験になりました。説明を見ても全て英語で書かれてあって読むのにすごく苦労しました。私達はホテルでコーヒーを飲むことにしました。ですがコーヒーメーカーの使い方が分からず説明を頑張って読んでとても時間がかかりましたが、美味しいコーヒーを飲むことが出来ました。何か、一步前進したように感じました。お土産を買う時も英語で書かれてあって何個入ってるんだろうとか、なに味だろうとか全ては分からなかったけど、それもゆっくり読んで、わかった時はとても嬉しかったです。

私は、ディズニーに行った時が一番英語を使えていたなと思っています。道も分からず聞くしかない状況にあるので、キャストさんに聞いてより多くの場所や乗り物に乗ることが出来ました。売店の店員さんに話しかけられたりして、そこでもコミュニケーションをとることができました。ディズニーに行ったのは最後の日だったので少し英語に慣れてきて、なんて書いてあるか読んでみたり、すごく興味をもつようになりました。

私はアメリカに行かせていただいて、自分の視野が広がったと思います。英語に興味を持ったし、もっと英語を勉強したいと思うようになりました。そして英語を勉強したら何かの役に立てたらいいなと思っています。今回、このような企画を作ってくださった全ての関係者の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。この体験が今後、自分の学校生活の中で役に立てたらなと思います。もっともっと英語を使う機会を増やして、自分の将来の幅を広げていきたいと思っています。また機会があればアメリカに行きたいです。



Disneyland Resort



## (9) サンバーナディノ市訪問・初めての国際交流

立川市立立川第九中学校 2年 高橋 綺星 Ayase Takahashi

私は海外旅行をしたことが無いので、パスポートを取るのも初めてで、飛行機に乗るのも初めてでした。もちろん空港に行くのも初めてだったので、前日からドキドキしていました。飛行機の出発時間が遅れて待ち時間は長かったのですが、いろんなお店をまわったり、抹茶パフェを食べたりして楽しく過ごしました。飛行機が離陸する時は、ジェットコースターに乗っているような感じで少し怖かったです。

サンバーナディノ空港に着いたのは午後2時半頃で、最初に「日本と違う匂いがする」と思いました。あちこちで英語の会話が聞こえて、ドキドキしました。バスに乗って外の景色を見ていると、家の壁に水玉模様やガイコツの絵が描かれていて面白かったです。お庭や街並みに木が少なかったのは、サンバーナディノは日本より乾燥しているからなのかなあと思いました。

二日目、ロサンゼルス市内見学で歩道を歩いていると、有名人のサインをした手形や星がありました。ハリー・ポッターシリーズの映画俳優や、トランプ大統領のものもあって驚きました。午後は、総領事主催の60周年表彰式と夕食会に出席しました。名刺交換をした人の中に、私が卒業した若葉小学校の卒業生がいて、とてもびっくりしました。「若葉小学校は統合されて無くなって、私が最後の卒業生なんです。」と話す、「母校が無くなっちゃったのかあ。それは残念だけど、後輩に会えて良かったよ。」とおっしゃってくれて、たくさんお話することが出来ました。



Hollywood Walk of Fame

三日目は、サンバーナディノの高校生との交流がありました。お菓子やコインをラップで包んでボールにしたものを、手に鍋つかみをして中身を取り出すゲームをしました。私が一番最初に取り出すことが出来て、「すごい」と言われました。とても盛り上がり、楽しかったので、いつか友達と一緒にやりたいです。高校生と希望の星のペインティングをして、名刺に折り紙で作った四葉のクローバーを付けて渡したり、一緒に写真を撮り合ったりしました。夜の60周年記念式典では、作文の表彰をしてもらって、立川音頭を踊りました。とても緊張したけれど、踊ることは大好きなので笑顔で踊りました。終わった時に「上手だったね」と言われて嬉しかったです。

四日目のディズニーランドは、見学時間は短かったのですが、おみやげを買ったりして、とても楽しかったです。あっという間に時間は過ぎて、五日目は日本に帰る日です。ずっとアメリカにいたいという気持ちと、早く日本に帰りたいという気持ちが混ざっていました。飛行機が日本に着いた時は、やっと緊張がとけたような気持ちになりました。

そして作文を書いている今日(7月16日)、とても嬉しいことがありました。塾に行くため、東大和市駅の近くを歩いていると、サンバーナディノと一緒にゲームをした高校生4人に偶然、出会ったのです。交換留学生として日本に来ているそうで、向こうも私のことを覚えていて、笑顔で挨拶と握手をしました。私が名刺に付けた折り紙のクローバーのことも覚えていてくれて、簡単な折り紙の折り方を教えて欲しいと言われたので、チュールリップの折り方を教えました。「See you again!」と笑顔で言ってくれて、私も「See you again!」と言いました。また交流が出来て、本当に嬉しかったです。

サンバーナディノ市に訪問したことで、いろんなことに挑戦してみようという気持ちが強くなって、英語のミュージカルのオーディションに応募することにしました。訪問団に参加させて下さって、ありがとうございました。

## (10) 姉妹市提携60周年記念サンバーナディノ市訪問団に参加して

東京都立日野高等学校 1年 鈴木 康太 Kohta Suzuki

僕は、サンバーナディノ市訪問は今まで生きてきた中で最も貴重な体験だったと思います。今回のアメリカ訪問は、観光目的でないことや、参加学生の中では男子が自分一人だけということと初めてのフライトであることなどで、緊張が常に期待やうれしさを上回っていました。

アメリカでは初日から驚くことばかりでした。高速道路が五車線だったことや、買い物をするときはビニール袋を使うのではなく紙袋を使うことなど、日本とは全く違う雰囲気に圧倒されました。他にも、書ききれないほど日本と異なるところがありました。

日本との違いで特に驚いたのは英語の発音です。日本で習った英語の発音とアメリカ人の話す英語の発音が全く違って、さらに早口で話すので聞き取りづらく、「どこからきたのですか？」という質問に答えることができませんでした。そこで僕は英語力が足りていないことを改めて感じ、中学一年生で学ぶような英文にさえ答えられなかった自分が、今となってはとも恥ずかしく感じます。いくら発音が違っていても、ヒアリング能力をもっと持っていたら聞き取れていたはずだと、終わってから後悔する事ばかりでした。

しかしアメリカで学んだのは、決してマイナスな事ばかりではありません。式典の時には、パーティー会場に参加している全員が国や人種を超えて盛り上がっていて、こういった光景は日本ではなかなか見られないもので、思わず素敵だなと思いました。食事を取りに行くとき、訪問団の最高学年の一人として後輩にカッコ悪い姿は見せられないと、勇気を出して自分から女性の方と少しだけ会話をしました。言葉は通じたかはわかりませんが、本当に一瞬だったのですが心が通じ合えた気がして、楽しい時間を過ごすことができました。会話を終えた後、これはチャンスだと思い名刺と共に折り紙で作った兜をわたしました。「ありがとう！とても嬉しいよ！」と、その女性は喜んでくれました。そのときがアメリカにいた間の中で、最もうれしかった瞬間でした。

ついに帰国の日がやってきました。ロサンゼルス空港に着きお土産を買い、このまま無事に終われると思っていたのですが、最後の最後で財布を落とすという失敗をしてしまいました。親からも、添乗員さんからも外国で落とし物をすると大体返ってこないのを気付けてと言われていたので、戻ってくるなんてないと思って落ち込んでいるとスマホに訪問団の後輩から電話がかかってきました。お店の店員さんが僕の落とした財布に気付いて教えてくれたそうです。僕はこの出来事をきっかけに、今後日本を訪れる外国人観光客にも、おもてなしの精神と思いやりを持って接しようと思うようになりました。

また、時差ボケと慣れない海外での一人部屋で、なかなか寝られなかったことを経験し、家族・両親と姉弟の大事さも、あらためて気づくことも出来ました。この貴重で充実した経験を生かして、留学等も視野に入れて大切な高校生活を送りたいと思います。

今回、このような機会をくださった清水市長及び市の職員の方々、教育委員会の皆様、本当にありがとうございました。



## (11) 挑戦そして成長

東京都立上水高等学校 1年 富樫 陽菜子 Hinako Togashi

私のこの姉妹都市交流を一言で表すと「挑戦そして成長」です。

私は生まれてから日本を一步も出たことがなかったため、すべてが初めてで、驚きの連続でした。言語はもちろん、土地活用の違い、気候の違いなど一日一日、出来事一つ一つがとても新鮮でした。そのなかでも私は文化の違いにとっても驚きました。そこで今回は文化の違いについての出来事を書こうと思います。

一口に文化の違いと言っても様々なものがありますが、やはり一番違いがはっきりしていたのは、アメリカは日本よりも人と人との距離が近いということです。

日本では初対面の人と会話をするとき、ある程度の距離を保ちます。しかし、アメリカでは、知らない人にもニコッと微笑みかけ今日その日たった今出会った人にも、現地で挨拶とされているハグや握手をし、会話をします。日本人の私から見たら、ずっと前から知り合いだった人同士が話しているかのようでした。

また、アメリカのかたは、「YES」「NO」をはっきり言っていたように感じました。パーティーに出席させていただいたときにアメリカ人同士の会話のなかで、相手が尋ねたことに対し、「YES」「NO」をきっぱりと言い切るという場面を何度も目にしました。実際、私も総領事公邸でアメリカの方と会話をした際に、「YES」「NO」でたくさんの違いを感じました。あまり人に対して、はっきりものを言うタイプでない私にとって、この違いには衝撃を受けました。

また、人と人との距離が近いという面で他にも、消極的な私とは反対に、アメリカの方は積極的に私たちに話しかけに来てくれた、というものがあります。そのおかげで、英語を話すことや外国人の方と話すことに気後れすることが次第に少なくなっていました。

私の学校にはALTといって、英語の授業にネイティブの英語を話す先生がいます。その方に今までの私は、目があっても「HELLO」と挨拶するくらいでそのあとの会話は避けていました。「間違っている文法だったらどうしよう、失敗したらやだな、怖いな」という気持ちが勝ってしまっていたからです。でも、この訪問期間中に、現地の方から「Don't be afraid of making mistakes!」と言われていくうちに、この気持ちは薄れていきました。そして日本に帰ってきてからの英会話の授業ではALTに自分から積極的に話しかけに行くことができるようになっていました。「HELLO」だけではありません。まだ、カタコトな英語で言葉が止まってしまうこともありますが、以前よりはずっと会話を楽しみ、積極的に話すことができました。

このように、わたしはこの四泊六日のアメリカ訪問で、たくさんのことに挑戦し、たくさんのことを学び、



そこからたくさん成長することができました。私をこんな素敵な経験ができる機会に参加させてくださった、立川市長様や立川市役所職員の皆様、アメリカの皆様をはじめとする、すべての皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。本当に本当にありがとうございました。

これからわたしはこの貴重な体験を無駄にせず最大限に活用し、今後の人生にいかしていきたいと思います。身近なことでは、家族や友達など親しい人たちに少しずつこのアメリカであった出来事を話して、少しでも国際交流に興味を持ってもらえるようにしたいです。私がする小さな行動が国際社会の友好化に少しでも貢献できれば良いと思います。それも、「平和な日本を守るために」できることの一つなのではないかと私は思います。

## (12) 知りたいと思う気持ち

明治学院東村山高等学校 1年 常盤 奏 Kanade Tokiwa

この広い海を越えたらどんな世界が広がっているのだろう。幼いころから外国には興味がありました。テレビや雑誌で見る外国は日本と違って、同じ地球なのに違う世界が広がっていました。しかし実際に見ることはなく、想像だけの世界でした。

15歳の秋。「おめでとう」そう言って告げられた出来事が私の人生に大きな刺激を与えることになりました。初めて外国へ行くことが決まったのです。初めて生の英語に触れることができ、初めて本場の料理を食べることができ、初めて外国の人と交流することができる。そんな初めてづくしの出来事に興奮する反面、私の心の中では不安の渦が巻いていました。

「Excuse me」、そう声をかけられて顔を上げると外国の観光客の方に道を尋ねられました。しかし自分の英語に自信がなく、緊張して話せず、あまり話しも聞かずに簡単に諦めてしまいました。そのことを思い出すと後悔で頭がいっぱいになり不安で仕方がなくなりました。その反面、そんな自分を変えたいと強く思うようになりました。

様々な思いを胸に、乗った飛行機を降りた時に感じたのは大きな戸惑いと不安でした。いつもと違う言語、いつもと違う環境、スケールの大きい沢山のもの。日本と違うところだらけで圧倒され、私は消極的な気持ちになりました。交流の当日を迎えてもまだ不安な気持ちは消えず、後悔だけはしたくない、どうしようと思う頭の中がいっぱいになりました。しかし、そんな不安な気持ちを取り除いてくれたのは現地のアメリカの学生達でした。「こんにちは！」と笑顔で話しかけてくれた瞬間、私の中で何かが壊れました。「何歳なの?」「何が好き?」「嫌いで英語でなんて言うの?」「日本のどんなところが好き?」私のこと、日本のことを沢山知ろうとしてくれました。私自身も自分のこと、日本のことを知ってもらえるのが嬉しくて、すぐに打ちとけることができました。また、慣れない英語を使う私の話をフォローしながら最後まで聞いてくれる優しさにも感動しました。住んでいるところが異なり、言語が異なっても相手のことを知ろうとする気持ちと受け止める優しさがあれば国籍だって言語だって関係ないと思いました。アメリカの学生の皆さんのおかげで自然に明るく話しかけることができる、つまり自分を変えることができました。スーパーでお土産を探している時に会った女性の方と英語で話した時の別れ際に「あなたの英語いいね！」と言われました。その時の嬉しさは忘れられません。

今回の経験を通して自分を変えることができました。世界観が広がり、もっと広い視点で物事を見ることができるようになりました。世界で今なお続いている内乱や戦争。この多くは相手のことをまだあまり知らないから起こっていることだと今の私は考えます。今回の私達がそうであったように、まずは相手のことを知る。そして受け止める優しさが大切だと思います。私はこれらの事を何かの形で伝えていきたいです。この気持ちを持った時こそが世界平和の第一歩だと思います。

私は今でもアメリカで知り合った友達と連絡を取り合っています。何気ない会話だけど、相手のことを知ることができてとても楽しいです。また、連絡を取る度にアメリカの学生の優しさ、心の広さを感じます。もらった優しさを受け止めて、今度は私が発信していきたいです。アメリカで培ったことを心に刻み、次アメリカの友達と会う機会をととても楽しみにしています。



### (13) 思いやりトラベル

東京都立砂川高等学校 1年 野村 奈夕 Nayu Nomura

アメリカ研修を目前にして、私は不安な気持ちでいっぱいでした。というのも、高校の中間テストと日程が重なっていたためです。けれど今は、そんな不安など小さなことだったのだと感じてしまうほど満足しています。今しかできない体験というのはもちろんですが、何よりもたくさんの人となつなうことができた気がします。同世代である現地の学生さんとの交流は、アメリカの文化を最もよく知ることのできる素晴らしい機会でした。

正直なところ、一日目は母国に帰りたい気持ちがとても強かったように思います。その気持ちが日が経つにつれて薄くなっていった最大の理由は、現地での友達ができたことです。交流を控えた前日までは、一緒に来ていた母国の友達から離れることを怖いとすら思っていました。ですが当日、バスで向かった目的地には、満面の笑みで手を振っている学生さんの姿が見えました。その姿を見て、慣れない土地を前に心の底の部分に少しずつ積み重なっていた窮屈さががふと、軽くなるのを感じたのです。それは学生さんが笑顔で迎え入れてくれたからこそでしょう。

かわいらしい装飾が施された部屋を進んでいくと、星型の木と絵の具が用意されている部屋に案内されました。それは制作の一つだったのですが、木に色を塗っていくという単純な作業にも、不器用な私は苦勞してしまいました。そんなときにも、学生さんが「この色があるよ」「こういう色はどう？」と声をかけてくれたおかげで、楽しく取り組むことができました。そのとき私は、言語や文化は違っても、相手に伝えたいと言う気持ちがあれば、たとえ少しの知識しかなくても、コミュニケーションが取れるのだということに改めて学びました。制作を終えたあとは、全員でアメリカのゲームをすることになりました。ゲームのルール説明ももちろん英語なので聞き取るのは難しかったのですが、単語を一つ一つ拾い上げて考えることで、私にも聞き取ることができました。日本のゲームとは違い斬新なルールで、ルールに従って進めていくことで精一杯になってしまうのではと思っていましたが、実際に始めてみるととても楽しく、その場にいる全員が笑顔になりました。記念写真を撮ったあとには、学生さんは家族が迎えに来たため、家に帰ることとなりました。帰る瞬間にハグもしてくれて、国外ならではの文化を感じましたが、それとは裏腹に、私の中にあった文化の違いによる壁はなくなっていました。

この後、本来であれば研修のメインである式典に出席するはずだったのですが、初めての異国の地で慣れない生活を続けたためか、体調を崩してしまい出席することができませんでした。この研修で最も重要ともいえるイベントに参加できないことへの悔しさや色々な方に迷惑をかけているという事実、体調不良が重なったせいか涙が溢れてしまったのを覚えています。看護師さんと一緒にホテルに戻った私が寝ていると、母国の友達から連絡がありました。様子を聞かれたので体調が優れずホテルにいることを伝えると、突然の電話に驚きました。友達は焦った声で「大丈夫!？」と何度も聞いてくれました。式典に参加した友達も、ホテルまで戻ってくるなりすぐに声をかけてくれました。支えてくれる友達の大切さをよく実感した日で、挫けてないでまた頑張ろうと、そう思うきっかけを与えてくれるには十分な経験です。人の優しさにたくさん触れた一日は、式典にこそ出られなかったものの、場所や文化など関係なく助け合って生きていく人々の力強さを教えてくれたのです。

私はこのアメリカ研修で、人の優しさにたくさん触れました。人は一人では生きていけない。だからこそ、誰かの支えがあって今の自分があるのだと実感しました。そしてそれは、国籍、言語、文化などではなく「思いやり」でつながっているのだということ、自身の経験を通して改めて自分の心に刻むことができました。自分の思いやりはきっと相手に伝わるだろうし、お互いが相手を思いやる気持ちがあれば、どんな人とも心を通わせることができます。アメリカの学生さんや母国の友達がそうであったように、今度は私が「思いやり」の輪を広げて、できるだけたくさんの人の支えになりたいです。

#### (14) つながっている3つのふるさと

東京都立井草高等学校 1年 野村 未恭 Miku Nomura

私は飛行機を降りたそのとき、日本とは全く違う風景を見て、心を奪われた。幼い頃からずっと夢に見ていたアメリカ。英語が飛び交う空間、私よりはるかに背の高い人々、きらきらと輝く金色の髪…。目に入る全てが私がアメリカにいることを証明してくれているみたいだった。アメリカ行きの飛行機が五時間遅れ、私は疲れがたまっていたはずだったが、そんな疲れを忘れさせるほど、嬉しい気持ちでいっぱいになった。「あー、やっとだ。ずっとずっと行きたかった、ここがアメリカかぁ」。キョロキョロと辺りを見渡しながら、幼き頃の祖母に想いを馳せた。

祖母は15才までカリフォルニアで育った。アメリカ人の祖母についての主張作文で、このアメリカ行きが実現した。受賞の連絡とアメリカ行きを、今は宮崎に住む祖母に伝えたとき、「私の故郷を思う存分楽しんできなさい。」と喜んでくれた。

祖母が育ったのはサンタモニカという小さい街だ。この旅のしおりが配られたとき、2日目にサンタモニカを観光できると記されていた。しっかりと自分の目で、祖母が育った街を見てこようと決めた。2日目にサンタモニカの町並みを見て、「ここが祖母の育った場所か、素敵なところだな、青い海が宮崎に似てるなあ。」と思いながら夢中でカメラのシャッターを切った。そしてその写真を祖母に送ると、「懐かしいなあ。こんなお店ができたんだ。この海でよく遊んだのよ…。だいぶ雰囲気がかわったのね、昔を思い出して涙が出てきたよ。」と返事が来た。幼い頃祖母はよく砂浜でお城を作って遊んでいたらしい。サンタモニカの海は、祖母にとって、今は亡き曾祖母や曾祖父と過ごした、温かい日々を表していると思う。その返事を読みながら、私は小さい頃に祖母と一緒に作った1冊の絵本のことを思い出した。絵本のコンクールに出すために、祖母と私でクレヨンで丁寧に作品を仕上げたのをよく覚えている。「未恭は青い海を描いてね、お魚さんたくさんいたらかわいいね。グラニイは砂のお城を描くわ。グラニイのマミとダディーと海にバケツを持って行ってよく作っていたのよ。」そんなことを言っていたと思う。私は曾祖父に会ったことはないし、曾祖母も私が物心つく前に亡くなってしまった

ので、2人のことをよく知らない。ただ2人のことをよく話す祖母から、曾祖父と曾祖母はとても優しい人だったんだと思う。祖母がたくさんの思い出を話しながら作った絵本は、「つながっている2つのふるさと」というものだ。サンタモニカと宮崎、2つの場所で祖母は人生の大半を過ごした。宮崎から、海をずっとずっと渡っていくとサンタモニカにたどりつく。そして宮崎の海は、とてもサンタモニカの海に似ている。祖母にとっての2つのふるさととは距離は遠くても、常につながっている

という意味らしい。今までこの話の意味がよくわかっていなかったが、今回実際にサンタモニカの海を見て、祖母の思いがよくわかった。その思いを理解できてとても幸せな気持ちになった。

私のルーツがあるアメリカのカリフォルニアで、英語をたくさん使って話したり、式典に出席させていただいたり、美味しいご飯を食べたり、現地の方々と交流できたりしたことは、私にとって忘れられないものになった。向こうに友達もできた。本当に本当に嬉しい気持ちで溢れている。立川市とサンバーナディノ市が、60周年姉妹都市関係を結んでいるので、立川とカリフォルニアもつながっている。宮崎もカリフォルニアとつながっている。私は宮崎で生まれて、立川で育った。ルーツはカリフォルニアにある。私にとっての3つのふるさととは、海や心や人によってつながっている。これからもサンバーナディノ市と姉妹都市関係を続けてもらうために、私もこのプロジェクトを支援していきたい。

この3つのふるさとがずっとずっとつながっていますように。



## (15) 言葉を超えて

昭和第一学園高等学校 1年 山下 菜絵 Nae Yamashita

日本人は自分に自信を持ってない人が多いと言われてる。まさに私がそうである。周囲の目を気にして極力目立たないようにしたり、いつも周りからの評価を気にしてしまう。

そんな私があることをきっかけに少し変わることができたと思う。それは中学3年生の夏休みに書いた主張作文が立川市で入賞し、その副賞としてサンバーナディノ姉妹都市提携60周年記念訪問団の一人としてアメリカに行くことになったことだ。思いがけない幸運に喜んでいたら、正直かなり不安でもあった。

だがその不安とは裏腹にアメリカで見たもの、聞いたもの、感じたものは全て新鮮だった。その中でも特に感じたことは3つある。

1つ目は現地の人達と一緒に oven mitt game をしたことだ。このゲームはサランラップでぐるぐる巻きにされたお札や雑貨を鍋つかみで開けていき、もう1人がサイコロ2つをゼロ目に揃えるまでそれを続けるというゲームだった。現地で聞いた話だが、アメリカは普段家族が食事を共にすることがあまりなく、皆で1つの事に夢中になれる時間もなかなかないらしい。だから家族が集まって食事をする祭日などにこうしたゲームをして盛り上がるそうだ。私は英語が話せないのが大丈夫だろうかと不安になりながら参加したが、ゲームが始まると共に笑い合うことができ、一気に距離が縮んだ気がしていた。

またウェルカムパーティーの際、私は日本から持って行ったおやつと飛行機の中で作った折り紙を名刺と一緒に渡した。現地の学生はとても喜んでくれていた。それを見て私も嬉しかったのを覚えている。この時笑顔は各国共通であり、言語の違いは大した問題ではないと感じていた。

2つ目はストローについてだ。日本では冷たいドリンクを注文すれば、当たり前のようにプラスチックのストローを受け取りためらうことなどない。だが今プラスチック製ストローは世界的に問題となっている環境汚染の原因の一つと言われている。アメリカではシアトルをはじめ10を超える州が、飲食店でのプラスチック製ストローの提供を禁止。イギリスのマクドナルドやシンガポールのKFCも、プラスチック製ストローの使用中止を決めているそうだ。私が訪問したロサンゼルス、サンバーナディノ市でも紙ストローだった。現在日本ではプラスチック製ストローの使用禁止は決まっていないため時々見かける程度だ。環境汚染に繋がるのであれば、日本も一刻も早く紙ストローの普及が進んで欲しいと思った。

3つ目はアナハイムディズニーランドでの出来事だ。それはバイキング形式のレストランで昼食を取ろうとしていた時、謝ってジュースをご飯の中にこぼしてしまった。私はどうすればいいのかかわからず、迷惑をかけてはいけないとそのまま会計を済ませようとしていた。だが店員さんが異変に気付いてくれ、すぐ新しいものと取り替えてくれた。日本では当たり前のようなことかもしれない。でも言葉の通じない国でも私の表情を読み取り、優しく手を差し伸べてくれたことに感激した。

今回の研修で私は言語の違いを超えて人と人との繋がりを感じた。また日本との景観の違いや文化の違いも肌で感じることもできた。初日は正直早く日本に帰りたと思っていた。だがその気持ちは日が



経つにつれてなくなり、最終日にはまだ日本に帰りたくないと思うほど楽しい研修となっていた。実際に行かないと分からないことが沢山知れたと思う。何より楽しもうという気持ちが大切なんだと思え、そういう気持ちによって自然と積極性が出てくるんだと気付いた。この経験は私のこの先の人生にとっても大きな影響があったと思う。この研修に携ってくれた立川市やサンバーナディノ市の全ての方に心から感謝を伝えたい。ありがとうございました。